

**プロジェクトマネージャ  
章別午前問題 第 1 章  
解答・解説**

## 問 1：正解（イ）

プロジェクトマネジメントに関する問題。選択肢を見ると、（想像の域を超えないが）共通フレームと、情報処理技術者試験の各試験区分のシラバスに関する問題だと思われる。“適切なもの”をひとつ探す問題なので、選択肢を順番に見ていく。

ア：ここでいう“企画プロセス”や“システム化計画書”は、おそらく共通フレーム 2007 で定義されているものを指していると考えられる。PMBOK（第4版）には無いからだ。だとすれば、確かに“システム化計画書”は、この企画プロセスで作成される。加えて、プロジェクトを運営するのはプロジェクトマネージャが成すべき事項だ。この点は正しいが、プロジェクトの運営は、システム計画書に従って実施されるわけではない。同じく企画プロセスで作成される“プロジェクト計画書”に従って運営される。したがって誤りである。但し、システム化計画とプロジェクト計画は1対n、すなわちひとつのシステム化計画の中で複数のプロジェクトが実行されることが多いが、1対1の場合もあり、その場合は「プロジェクト計画はシステム化計画に含めても構わない」とされているので、100%完全に誤っているというわけでもないことも、少しだけ念頭に置いておこう。ちなみに、ここで行うシステム化計画は、ITストラテジストが担当する。小さい規模だったり、詳細なシステム化計画だとシステムアーキテクトの場合もある。

イ：正しい。システム化計画書とプロジェクト（管理）計画書は、いずれも“企画プロセス”のアクティビティで作成される成果物になる。

ウ：ソフトウェア詳細設計は、開発プロセスのアクティビティになる。そして、このアクティビティで、最新のシステム技術を使用した解決方法を担当するのはシステムアーキテクトになる。誤り。

エ：「プロジェクトのスコープや目的」を定義していくのは、プロジェクトマネージャだが、ここで問われているのは、開発プロセスの“システム方式設計”に入ってからアクティビティなので、これもシステムアーキテクトの作業になる。“適宜明確にしていく”という表現からも、マネジメントの仕事ではないことがわかるだろう。誤り。

**問3：正解（イ）**

プロジェクトのライフサイクルに関する問題。選択肢を順番に見ていく。

ア：ステークホルダがプロジェクト完成時のコストに対して及ぼす影響度合いは、プロジェクトの期間で変わるものではない。一概に、終盤が最も高いとはいえない。したがって誤り。

イ：プロジェクトの不確実性の度合いが最も高いのは、まだ何も決まっていないプロジェクトの開始時である。したがって、この記述は正しい。

ウ：要員の必要人数が最大になるのは、通常は、プロジェクト中盤のプログラミング工程になる。開始時、終盤はそれよりも少なく、山のような形になる。したがって、「終了時」ではないので誤り。

エ：変更やエラー訂正のコストは、プロジェクトの初期段階が最も高いのではなく、初期段階が最も低く、プロジェクトが進行するにつれ高くなっていく。誤り。

**問3：正解（イ）**

プロジェクトライフサイクルに関する問題。プロジェクトライフサイクルとは、プロジェクトの開始から組織編成と準備、作業実施、プロジェクト終結までの一連のフェーズの集合のことをいうが、選択肢を見ていくと、単に“プロジェクトの持っている特徴”のことが問われているだけのようだ。それを前提に、選択肢を順番に見ていこう。

ア：開発要員数は、開始直後の上流工程では少人数で進められ、プログラミング・単体テストをピークに増加していく。そこからは徐々に減少していくため、（横軸に日程、縦軸に要員数を示したグラフでは）ちょうど“山”のような形になるのが一般的である。したがって、逆の表記になるため不適切である。誤り。

イ：ここでいう“実現する機能の不確実性”とは、プロジェクトに存在するリスクのこと。リスクは、未確定要素の多いプロジェクトの立ち上げ段階では多いが、プロジェクトが進むにつれて、それらが“確定”していくため減少していく。適切である。これが正解。

ウ：ここでいう“ステークホルダが（コストを変えずに）プロジェクトの成果物に対して及ぼすことができる影響の度合い”とは、“ステークホルダの主張がどこまで通るか？”というように、シンプルに読み替えればいい。そう考えれば、成果物をこれから作り上げていくプロジェクト開始直後が最も高く、成果物が固まってしまっているプロジェクト完了直前には最も低くなる。追加コストを投入すれば、多少は主張を受け入れることもできるが（影響の度合いを高めることはできるが）、問題文に書いている通りコストを変えない前提なので、不適切である。誤り。

エ：変更やエラーの修正については、一般的に、完了に近づくごとに成果物の完成比率が高くなることから、修正の影響度は大きくなっていく。不適切である。誤り。

## 問 2 : 正解 (ア)

プロジェクトライフサイクルに関する問題。プロジェクトライフサイクルとは、プロジェクトの開始から組織編成と準備、作業実施、プロジェクト終結までの一連のフェーズの集合のことをいう。選択肢を順番に見ていこう。

- ア：ステークホルダの影響力は、時間の経過とともに低下していく。これは、“ステークホルダの主張がどこまで通るか？”というように、シンプルに読み替えればいい。そう考えれば、成果物をこれから作り上げていくプロジェクト開始直後が最も高く（要件定義の頃には様々な要求を出してくるなど）、成果物が固まってしまっているプロジェクト完了直前には最も低くなる（確認するだけ）。一方、要件変更への対応コストは、プロジェクトが進むにつれ上昇する。一般的に手戻りは後半になればなるほど大きくなる。外部設計フェーズでの変更なら要件定義書や外部設計書だけの変更で済むが、システムテストフェーズでの変更だとプログラムの修正や再テストも必要になる。
- イ：要員数は、開始直後の上流工程では少人数で進められ、プログラミング・単体テストをピークに増加していく。そこからは徐々に減少していくため、（横軸に日程、縦軸に要員数を示したグラフでは）ちょうど“山”のような形になるのが一般的である。また、リスクはプロジェクトが進むにつれ減少する。プロジェクトに存在するリスクは、プロジェクトの立ち上げ段階では多いが、プロジェクトが進むにつれて（時間の経過とともに）、それらは“確定”していくからだ。いずれも誤り。
- ウ：要件変更への対応コストはプロジェクトが進むにつれ上昇する。プロジェクト要員数のグラフは、プログラミング・単体テスト工程を頂点にした“山”のようになる。いずれも誤り。
- エ：リスクはプロジェクトが進むにつれ減少する。ステークホルダの影響力は、時間の経過とともに低下していく。いずれも誤り。

## 問 2：正解（エ）

JIS Q 21500:2018 に関する問題。ここで問われている「プロジェクト作業の管理」は、対象群が“統合”で、プロセス群は“管理”（PMBOK だと“統合マネジメント”、“監視・コントロール”プロセスに該当）になる。したがって、選択肢エの「統合的な方法でプロジェクトを完了すること」が目的になる。正解はエ。特に JIS Q 21500:2018 の定義を知らなくても、対象群が“統合”だとさえわかれば「プロジェクト全体計画に従って、統合的な方法で」という説明から解答できたり、消去法で解答できたりするだろう。ちなみに、選択肢はすべて「管理」プロセス群の説明になっている。

ア：「品質要求事項及び規格」や「不満足なパフォーマンス」という表現より、対象群は“品質”（PMBOK の品質マネジメント）のことだということがわかる。誤り。品質管理の遂行プロセスの説明になる。

イ：「チームのパフォーマンスを最大限に引き上げ」という表現より、対象群は“資源”（PMBOK の資源マネジメント）の説明だということがわかる（プロジェクトチームのマネジメントプロセスの説明）。選択肢には「コミュニケーション」という表現もあるので、対象群“コミュニケーション”のプロセスと考えるかもしれないが、コミュニケーション（マネジメント）の目的は「プロジェクトのステークホルダのコミュニケーションのニーズを確実に満足し、コミュニケーションの課題が発生したときにそれを解決すること」である。いずれにせよ誤り。

ウ：「変更を管理」という表現より、対象群は“統合”で、かつ“管理”プロセス群ではあるが、こちらは変更の管理プロセスの説明なので誤り。

## ■ プロジェクト憲章

### ⑥プロジェクト憲章の目的

H22-1

#### 問 1：正解（エ）

PMBOK に関する問題。プロジェクト憲章について問われている。プロジェクト憲章を発行する最大の目的は、当該プロジェクトを公式に認可させることである。これは PMBOK に明記されているので、他の選択肢に関わらず（エ）が正解になる。

ア：現場では、プロジェクト憲章の中に”プロジェクト方針”を含めて、キックオフの時にそれをメンバに伝えていることがあるかもしれない。しかし、PMBOK の定義ではそうになっていない。プロジェクト憲章は、プロジェクト方針を伝えることを目的に作成されるわけではないし、その記述を含んでいても明確には書かれていない。したがって誤り。

イ：スポンサはすでに決定している。誤り。

ウ：プロジェクト憲章作成時には、まだプロジェクトマネジメント計画書は作成されていない。誤り。

## ■ プロジェクト憲章

### ⑦プロジェクト憲章の知識エリア・プロセス群

H26-3, H23-2

#### 問 3：正解（エ）

PMBOK に登場する用語の意味を問う問題。個々のプロセスが、9つの知識エリア及び5つのプロセス群（第4版）のどこに位置づけられるかを知っているかが試されている。ここで問われているプロセスは、プロジェクト憲章（→第7章参照）。9つの知識エリアは「統合マネジメント」、5つのプロセス群は「立上げプロセス群」なので、正解は（エ）になる。

## ■ プロジェクト憲章

### ⑧プロジェクト憲章(1)

R02-3, H30-2

#### 問3：正解(エ)

プロジェクト憲章に関する問題。“プロジェクトを正式に認可するプロセス”というニュアンスの記述を探すというスタンスで選択肢を順番に見ていく。

ア：ビジネスケース及びベネフィット・マネジメント計画書などのビジネス文書の説明。プロジェクト憲章の作成プロセスのインプットになる。誤り。

イ：プロジェクトマネジメント計画書の説明。

ウ：プロジェクトスコープ記述書の説明。

エ：これが正解。

## ■ プロジェクト憲章

### ⑨プロジェクト憲章(2)

H25-4

#### 問4：正解(エ)

プロジェクト憲章(→第7章参照)に関する問題。選択肢を順番に見ていく。

ア：プロジェクトマネジメント計画書の説明。誤り。

イ：プロジェクトスコープ記述書の説明。誤り。

ウ：WBS (Work Breakdown Structure) の説明。誤り。

エ：プロジェクトを認知、承認する目的を持つのがプロジェクト憲章。正解。



#### 問 4：正解（イ）

プロジェクト憲章（→第7章参照）について問われている。問題文に記述されている「プロジェクトの開始を公式に承認する文書」とは、プロジェクト憲章のことを指している（プロジェクト憲章を発行する最大の目的は、当該プロジェクトを公式に認可させることであると PMBOK に明記されている）。そのプロジェクト憲章の作成を依頼された者が次に行う行動は、それをプロジェクトスポンサに提出し承認を得ることになる。承認されるとプロジェクトが立ち上がったことになる。したがって、他の選択肢に関わらず（イ）が正解になる。念のため、他の選択肢についてもチェックすると、次のようになる。

ア：プロジェクトの開始を公式に承認するのはプロジェクトマネージャではない。プロジェクトスポンサになる。また、その文書も契約書ではない（契約書に基づく契約の締結は重要だけでも）。

ウ：プロジェクトの開始を公式に承認するのはプロジェクトマネージャではない。プロジェクトスポンサになる。また、その文書もプロジェクト作業範囲記述書ではない。プロジェクト作業範囲記述書は、プロジェクトが正式に承認されて立ち上がった後に作成する文書のひとつである。

エ：プロジェクトマネジメント計画書も、プロジェクトが正式に承認されて立ち上がった後に作成する。誤り。

**問 3：正解（イ）**

各種のマネジメント技法に関する問題。この説明はコンフィギュレーションマネジメントの説明になる。したがって正解はイになる。

- ア：アード・バリュー・マネジメントは、プロジェクトの進捗状況を定量的にリアルタイムで把握する手法で、進捗状況と予算の消化状況を同時に把握できるという特徴を持つ（→第4章 予算 参照）。
- ウ：コンフリクト・マネジメントとは、プロジェクトという環境で発生する衝突や対立に対して、適切に対処し解消することで、より高い創造性とより良い意思決定につなげていくマネジメントのことである。
- エ：ポートフォリオとは、戦略目標を達成するためにグループとしてマネジメントされたプロジェクト、プログラム、サブポートフォリオ、および定常業務が収集されたもののことで、そのマネジメントがポートフォリオマネジメントになる。

■ プロジェクトの技法

⑫ 差異分析

H26-10

**問 10：正解（ウ）**

プロジェクトマネジメントの実績報告のプロセスにおいて、スコープ、コスト、スケジュールに関して、ベースラインと実績の乖離を明確にするために使用される技法は、差異分析（→用語集）になる。したがってウが正解。

- ア：what-if シナリオ分析（→用語集）
- イ：傾向分析（→用語集）
- ウ：正解
- エ：モンテカルロ法（→用語集）

## 問 12：正解（ウ）

傾向分析は、数学的モデルを用いて、過去の結果に基づいて将来を予測する分析技法である。したがって選択肢の中だと、時間の経過に伴うプロジェクトのパフォーマンスの変動を分析するというものになる。したがってウが正解。

ア：「期待値を計算して」という記述から、期待金額価値分析（EMV：Expected Monetary Value）（→第3章「リスク」参照）の説明になる。設問の「シナリオの関係を図に」というのはデシジョン・ツリーを使うことが多い。

イ：この記述は、広義にはリスク分析で必ず行うべきことだが、狭義には感度分析（→第3章「リスク」参照）の説明になる。

エ：「魚の骨のような図」という記述から、QC7つ道具の特性要因図（→第6章「品質」参照）の説明になる。

## ■ プロジェクトスコープ

### ⑭スコープコントロールの活動

H28-5

## 問 5：正解（ウ）

スコープとは“範囲”を意味する言葉で、プロダクトスコープ（成果物の範囲）とプロジェクトスコープ（作業の範囲）の二つがある。スコープコントロールとは、スコープマネジメントのプロセスで、当該プロジェクトにおけるそのあたりの“スコープ”に変化があった場合に実施するマネジメントになる。そうした知識を前提に、成果物の範囲や作業範囲に変化が無いかどうかを中心に選択肢を見て行けばいい。

ア：プロジェクトの期間の増減だけなので統合変更管理プロセスの活動になる。誤り。

イ：プロジェクトの費用の増減だけなので統合変更管理プロセスの活動になる。誤り。

ウ：「～に関わる作業は別プロジェクトで実施することにした」というのは、プロジェクトの範囲（プロジェクトスコープ）が変更になったので、スコープコントロールの活動になる。これが正解。

エ：プロジェクトの体制の変更なので統合変更管理プロセスの活動になる。誤り。

### 問 3：正解（ウ）

PMBOK に登場する用語の意味を問う問題。個々のプロセス（第3版では44のプロセス，第4版では42のプロセス）における，インプット及びアウトプットが問われている。

この問題であれば，そこまで（個々のプロセスにおけるインプット及びアウトプットまで）確実に暗記していなくても，様々なプロジェクトマネジメントにおける普遍的な常識から正解は得られると思われるが，おそらく今後は，選択肢の意味を含めて，ある程度プロセス間の情報遷移も覚えておかねばならないだろう。

プロジェクト統合マネジメントにおいて，プロジェクトスコープの拡張や縮小に関連するのは，統合変更管理プロセスになる。このプロセスで承認を得た変更要求に基づいて，スコープの拡張や縮小は実施されなければならない。したがって正解は（ウ）になる。他の選択肢の“欠陥修正”，“是正措置”，“予防処置”は，いずれも“変更要求”の中のひとつである。

**問 15：正解（ウ）**

プロジェクト・スコープ記述書に関する問題。スコープとは“範囲”のこと。プロジェクトスコープ記述書には、要素成果物（プロダクトスコープ）と、要素成果物を生成するために必要な作業（プロジェクトスコープ）を記述する。したがって選択肢（ウ）が正解になる。

ア：WBS やスコープベースラインは、プロジェクトスコープが確定してから、プロジェクト・スコープ記述書をインプット情報とした作業になる。したがって誤り。

イ：必ずしもそうではなく、ステークホルダが「当然、プロジェクトには含まれているはず。」とみなす恐れがある場合など、必要に応じてプロジェクトで除外されるスコープを記述しておく。したがって誤り。

ウ：正しい

エ：プロジェクトの前提条件のうち、プロジェクトスコープ記述書を作成する段階で明確になっているものは確かに記述するが、それはプロジェクトの予算見積もりやスケジュール策定のインプット情報になる。したがって誤り。

**問 4：正解（ウ）**

WBS（→第 7 章参照）に関する問題。WBS 作成プロセスにおけるローリングウェーブ計画法について問われている。ローリングウェーブ計画法とは、プロジェクト計画書を段階的に詳細化していく手法のことで、短期的に完了しなければならない作業は、WBS の下位レベルに至るまで詳細に計画するが、遠い将来実施される作業については、上位レベルの WBS にとどめておく（詳細が明確になってから要素分解して詳細な WBS を作成する）計画立案方法になる。したがって、正解はウになる。ちなみに選択肢はすべて、“WBS 作成”プロセスの用語である。

- ア：WBS 辞書の説明。誤り。
- イ：WBS テンプレートの説明。誤り。
- ウ：正解。
- エ：要素分解の説明。誤り。

■ 変更管理

**問 1：正解（イ）**

JIS Q 21500:2018 に関する問題。ここで問われている「変更要求」は、“実行”プロセス群及び“管理”プロセス群からのアウトプットであり、それらの変更要求は全て“管理”プロセス群の“変更の管理”プロセスのインプットになる。したがって、相互に作用するのは、選択肢イの“実行”と“管理”になる。

### 問 3 : 正解 (イ)

PMBOK の用語, 変更要求の“是正措置”に関する問題。PMBOK の定義では, 変更要求には次の四つの事項があるとしている。これらの知識を念頭に選択肢を順番に見ていこう。なお, PMBOK の公式本の説明だけではイメージが沸かない場合は, こうした選択肢の例でイメージをしておくのもいいだろう。

是正措置：プロジェクト作業のパフォーマンスをプロジェクトマネジメント計画書に沿うように再調整する活動

予防処置：プロジェクト作業の“将来の”パフォーマンスをプロジェクトマネジメント計画書に沿うように再調整する活動

欠陥修正：不適合プロダクト等を修正するための活動

更新：コントロールされている計画書等に対する変更で, アイデアや内容の追加や修正を反映する。

ア：「要求されるレベルを満たさないことが予想される」時の活動なので“予防処置”の説明になる。

イ：実際に「遅れたので, 遅れを解消させるため」の活動なので“是正措置”になる。これが正解になる。

ウ：「プログラム（成果物）が要求仕様を満たしていない」ことが判明した時の活動は“欠陥修正”になる。

エ：「新しい法規制に対応するための活動」を追加しているので“更新”になる。

**問 35 : 正解 (ア)**

変更管理に関する問題。「テストが不十分にならないか」,「要件に合っていないプログラムが適用されないか」という観点で, 選択肢を順番に見ていく。

ア：特に問題はなく,「要件に合っていないプログラムが適用されない」ようにするには, 利用部門によるテストも必須。したがってこれが正解。

イ：開発者だけでテストをした場合,「要件に合っていないプログラムが適用される」ことを防ぐのは難しい。また, 中身を知っている開発者だけではテスト内容が偏ってしまうこともある。通常は, 開発者以外のテスターやチームリーダー, クロスチェックを行う別担当者などが行ったほうが「テストが不十分にならず」品質は向上する。それに選択肢 (ア) の解説同様, 利用部門によるテストも必須。したがって誤り。

ウ：本番環境と分離したテスト環境を用意できればそれは望ましいことだが, 必須ではない。また, テスト環境を用意するにしても, 最終的には本番環境でのテストも必要なので分離しているよりもネットワークで接続されていた方が良い。よって誤り。

エ：キャパシティ管理は変更管理とは無関係。あるいは, 本番環境を用いてテストする場合のことを考えると, リソースに余裕を持たせておかなければならないので, それを加味した上でリソース調整を行う必要がある。いずれにせよ誤り。



## 問 12：正解（ウ）

WBS（→第7章参照）に関する問題。ワークパッケージについて問われている。選択肢を順番に見ていこう。

- ア：WBSでは、上位から下位に向けて分解していくことになるので、原則、上位と下位の関係は1対多になる。誤り。
- イ：OBS（Organization Breakdown Structure）とは、WBSと同じ“階層構造”を表現する図になるが（Breakdown Structure）、その対象はプロジェクト組織になる。ワークパッケージやアクティビティとそれらを実施する組織の部署との関係を表すために作成される。誤り。
- ウ：ワークパッケージを、スケジュール管理しやすい単位にさらに細分化したものをアクティビティという。したがって、これが正解。
- エ：ワークパッケージは、WBSで分解された最下位レベルにある要素成果物のことをいう。関連のある要素成果物をまとめたものではない。誤り。

## 問 4：正解（イ）

PMBOK の用語，“組織のプロセス資産”に関する問題。組織のプロセス資産とは，過去のプロジェクトのデータや，それを分析して，プロジェクト計画作成時に活用するなど資産化したもので，問題文にもあるように“プロセスと手順”と“企業の知識ベース”の二つに大別される（次表参照）。ざっくり言うと，前者は“標準化されたドキュメント”で，後者は“収集されたデータ”になる。次表のように細かく記憶していない場合は，選択肢を“標準化されたドキュメント”か，“収集されたデータ”かで考えていけばいいだろう。“標準化されたドキュメント”は（イ）だけ。残りの選択肢は全て“プロセスと手順”の資産になる。

組織のプロセス資産	対象物の例
1. プロセスと手順	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 組織の標準プロセス</li> <li>・ 標準化されたガイドライン，作業指示書，提案評価基準，パフォーマンス測定基準</li> <li>・ テンプレート</li> <li>・ ガイドラインや基準</li> <li>・ 組織のコミュニケーション要求事項</li> <li>・ プロジェクト終結のガイドラインまたは要求事項</li> <li>・ 財務管理手順</li> <li>・ 課題と欠陥のマネジメントの手順</li> <li>・ 変更管理手順</li> <li>・ リスク・コントロールの手順</li> <li>・ 作業認可のための優先順位決定，承認，認可書発行等の手順</li> </ul>
2. 企業の知識ベース	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プロセス測定データベース</li> <li>・ プロジェクト・ファイル</li> <li>・ 過去の情報と教訓の知識ベース</li> <li>・ 課題と欠陥のマネジメントに関するデータベース</li> <li>・ コンフィギュレーション・マネジメントに関する知識ベース</li> <li>・ 財務データベース</li> </ul>

※ PMBOK ガイド第 4 版 P.33 より一部引用

### 問 3：正解（ア）

PMBOK の用語，“組織のプロセス資産”に関する問題。組織のプロセス資産とは，簡単に言えば「過去のプロジェクトで培われたノウハウを資産化したもの」で，“プロセス，方針および手続”と“組織の知識リポジトリ”の二つに大別されていて（下表参照），多くの計画プロセスのインプットになっている。

組織のプロセス資産	対象物の例
プロセス，方針および手続き	<b>立上げと計画</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ガイドラインおよび基準</li> <li>・ 各種方針のような特定の組織標準</li> <li>・ プロダクト・ライフサイクルおよびプロジェクト・ライフサイクル，方法と手続き</li> <li>・ 各種テンプレート</li> <li>・ 契約上の合意</li> </ul> <b>実行，監視，コントロール</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 変更管理手続</li> <li>・ トレーサビリティ・マトリックス</li> <li>・ 財務管理の手続き</li> <li>・ <b>課題と欠陥のマネジメント手続き</b>（選択肢ア）</li> <li>・ 資源可用性のコントロールと資源割当てのマネジメント</li> <li>・ 組織のコミュニケーション要求事項</li> <li>・ 作業認可のための優先順位付け，承認，発行の手続き</li> <li>・ テンプレート</li> <li>・ 標準化されたガイドライン，作業指示書，プロポーザル評価基準，パフォーマンス測定基準</li> <li>・ プロダクト，サービス，または所産の検証と妥当性確認手続き</li> </ul> <b>終結</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ プロジェクト完了ガイドラインまたは要求事項</li> </ul>
組織の知識リポジトリ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ コンフィギュレーション・マネジメントの知識リポジトリ</li> <li>・ 財務データ・リポジトリ</li> <li>・ 過去の情報と教訓の知識リポジトリ</li> <li>・ 課題と欠陥のマネジメント・データ・リポジトリ</li> <li>・ プロセスやプロダクトの測定データリポジトリ</li> <li>・ 過去のプロジェクトのプロジェクト・ファイル</li> </ul>

※ PMBOK ガイド第 6 版 P.40-41 を参考にまとめる

上記の表より，選択肢（ア）が正解になる。ちなみに他の選択肢は全て，組織体の環境要因に分類される。参考までに，組織体の環境要因についても表を作成して

おく。なお、ステークホルダーのリスク許容度は、この表には存在していないが PMBOK 第 6 版 P.93 に「組織体の環境要因」の一つとして記載されている。

組織体の環境要因	組織体の環境要因に含まれるもの
組織内	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>組織の文化、構造</b>、およびガバナンス（選択肢エ）</li> <li>・ 施設や資源の地理的な分布</li> <li>・ <b>インフラストラクチャ</b>（選択肢イ）</li> <li>・ 情報技術ソフトウェア</li> <li>・ 資源の可用性</li> <li>・ 従業員の能力</li> </ul>
組織外	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 市場の状況</li> <li>・ 社会的、文化的な影響と課題</li> <li>・ 法的制約</li> <li>・ 商用データベース</li> <li>・ 学術研究</li> <li>・ 国家標準または業界標準</li> <li>・ 財務上の考慮事項</li> <li>・ 物理的な環境要素</li> </ul>

※ PMBOK ガイド第 6 版 P.38-39 を参考にまとめる

## ■ アジャイル開発

### ②4 ベロシティ

H29-11

### 問 11：正解（エ）

アジャイル型開発プロジェクト管理のベロシティについての説明が問われている。ベロシティとは、選択肢（エ）に書かれているように「定められた期間で製造、妥当性確認、及び受け入れが行われた成果物の量」のことである。一般的には“速さ”を示す単語になるが、アジャイル開発では“一定期間で製造される成果物の量”になる。他の選択肢も、いずれもアジャイル開発の用語で、それぞれ次の説明になっている。

ア：ストーリーポイントの説明

イ：プロダクト・バックログの説明

ウ：バーンアップチャート、バーンダウンチャートなどの説明